

題目

「改訂自己志向・他者志向 MIE（ミエ）の構造と信頼性」

著者

西川和夫* *三重大学

掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 1995年 第20巻第2号 pp.117～125

分類

統計的尺度特性研究

問題および目的

交流分析の機能的自我状態モデルでは、CP（支配的親）から AC（順応的子ども）まで五つの機能的状態が仮定されている。著者は、この五つの機能それぞれに供給される心理エネルギーの志向性に、自己を対象として志向する方向と外界・他者を対象として志向する方向が区別できることを提唱した。このモデルに従って質問紙エゴグラムを試作し、さらに尺度構造を洗練した改訂尺度を作成した。本研究では、改訂された自己志向・他者志向エゴグラム（新称 IUE）の因子特性と、下位尺度の信頼性を確かめる。

方法

調査対象者：大学生および社会人 559 名（男 227 名、女 332 名、平均年齢 22.4 歳）。

使用尺度：自己志向次元 5 下位尺度 40 項目、他者志向次元 5 下位尺度 40 項目、合計 80 項目から構成される質問紙エゴグラム改訂 MIE に回答を求めた。

因子構造の分析：項目間の相関に基づき、機能的自我状態次元について 5 因子解、心理エネルギー志向性次元について 2 因子解を適用し、バリマックス回転により直交因子を抽出した。

信頼性分析：< α 係数 > 自己志向次元と他者志向次元の、それぞれ五つの機能的自我状態に対応する各 5 下位尺度ごとに、クロンバックの α 係数を求めた。< 再検査信頼性 > 別標本により（N=75）約 3 か月間隔で再検査相関係数を求めた。< 因子構造の独立標本再現性 > 独立した 2 標本（N=559、N=434）の回答結果から得られた合計四つの直交因子行列について、Tucker の一致係数を求めた。

結果および考察

自己志向機能的自我状態次元の因子構造：自己志向エゴグラムは ICP（自己志向支配的親の機能）、INP（自己志向養育的親の機能）、IA（自己志向成人の機能）、IFC（自己志向自由な子どもの機能）、IAC（自己志向順応的子どもの機能）と表示される五つの機能的下位尺度から構成される。直交因子行列は、下位尺度ごとに独立した高い負荷を示す。プラスマイナス .300 を超える他因子軸への重複負荷は INP の 1 項目に見られるのみである。ICP は「やり始めたことは、なっとくが行くまでやる」、「自分の理想を実現しようと、一生けんめいになる」など 8 項目を含む。因子 2 に高く負荷し、平均負荷量 .563、寄与率 7.25% である。INP は「生きることは、つらいことより楽し

いことが多いと思う」、「自分自身を大切にする」など8項目から成る。因子3に高い負荷があり、平均負荷量.475、寄与率5.62%である。項目「自分の性格を好きになれる」は、IACの因子1に逆符号の+.303の負荷がある。IAは「何かをする前には、自分にふさわしいか検討する」、「自分のしていることを意識する」など8項目から成る。因子5に高い負の負荷量を有する。平均負荷量-.442、寄与率4.58%である。IFCは「色いろなことを想像するのが好きである」、「自然の中にある物にも、心があるように感じる」など8項目を含む。因子4に高く負荷し平均負荷量.471、寄与率5.14%である。IACは「見捨てられたような思いをすることがある」、「自分が無力な感じがする」など8項目で構成される。因子1に負の高い負荷量を有する。平均負荷量-.592、寄与率8.70%である。

他者志向機能的自我状態次元の因子構造：他者志向エゴグラムは、UCP（他者志向支配的親の機能）、UNP（他者志向養育的親の機能）、UA（他者志向成人の機能）、UFC（他者志向自由な子どもの機能）、UAC（他者志向順応的子どもの機能）の下位尺度で構成される。プラスマイナス.300を超える他因子軸への重複負荷を示す項目はUFCの1項目のみであり、各下位尺度に対応する直交因子が抽出された。UCPは「他人には厳しいほうである」、「がんで怒りっぽいところがある」など8項目を含む。因子5に高く負荷し、平均負荷量.512、寄与率6.05%である。UNPは「人が喜ぶと、自分のことのように嬉しい」、「不幸な人のことを聞くと、同情せずにいられない」などの8項目で構成される。因子4に高い負荷を持ち平均負荷量-.532、寄与率6.85%である。UAは「他人を客観的に評価する」、「ものごとを思い込みや偏見で判断しない」など8項目で構成される。因子1に高く負荷し、平均負荷量.543、寄与率7.26%である。UFCは「よくおしゃべりをする」、「面白いことを言って人を笑わせる」などの8項目である。因子2に高い負荷を有し、平均負荷量.544、寄与率7.04%を示すが、「軽はずみなどところがある」の項目は因子1にも-.315の負荷量が見られる。UACは「嫌でも人に頼まれると断れない」、「相手に合わせようとして気を使う」などの8項目を含む。因子3に高い負荷があり平均負荷量.558、寄与率6.94%である。

志向性次元の因子構造：CPからACまでの機能的自我状態次元には、心理エネルギーの向かう対象に基づき、自己志向次元と他者志向次元の2次元が設定されている。したがって各機能的自我状態ごとに二つの志向性因子が抽出される。すべての機能的自我状態次元において、自己志向性因子と他者志向性因子にプラスマイナス.300を超える重複負荷は見られなかった。CP次元のICPは因子1に高く負荷し、UCPは因子2に高く負荷する、平均負荷量と寄与率はICP.568、16.88%、UCP.512、13.65%である。NP次元のINPは因子2に負の高い負荷量、UNPは因子1に高い負荷量を持ち、平均負荷量と寄与率はINP-.506、13.64%、UNP.541、15.65%である。A次元ではIAが因子2に、UAが因子1に高く負荷する。平均負荷量と寄与率はIA.433、10.94%、UA.541、16.61%である。FC次元のIFCは因子2に高い負の負荷量、UFCは因子1に高い負荷

量を有する。平均負荷量、寄与率は IFC - .488、12.57%、UFC.550、16.58% である。AC 次元では IAC が因子 1 に、UAC が因子 2 に高く負荷する。平均負荷量と寄与率は IAC.599、19.64%、UAC.545、16.54% である。

自己志向尺度の信頼性：内的整合信頼性を示す α 係数は、ICP.793、INP.737、IA.675、IFC.772、IAC.832 である。IA の数値がやや低い他は、おおむね高い信頼性が認められる。約 3 か月間隔で求めた再検査相関係数 r は (N=75)、ICP.807、INP.795、IA.844、IFC.839、IAC.661 であり、IAC がやや低い他は高い恒常性を保っている。

他者志向尺度の信頼性： α 係数は、UCP.738、UNP.776、UA.780、UFC.772、UAC.789 である。すべての尺度について、高い内的整合性が認められる。再検査信頼性 r は (N=75)、UCP.729、UNP.792、UA.783、UFC760、UAC.771 である。すべての尺度において高い再現性が得られている。

自己志向尺度の独立標本再現性：独立解因子構造の一致係数は、ICP.961、INP.977、IA .963、IFC.954、IAC.961 である。因子構造の一致性は極めて高いと言える。

他者志向尺度の独立標本再現性：Tucker の一致係数は、UCP.965、UNP.969、UA.976、UFC.968、UAC.961 といずれも非常に高い値である。対象が異なっても、安定した因子構造になることが分かる。

尺度平均値の性差：自己志向次元では INP と IFC で女性が有意に高い値を示している。

他者志向次元でも、UNP において女性の平均値が男性より有意に高い。男性より女性の方が主観的で内的な衝動の活動性が高く、自己と他者に対して養育的・保護的であろうとする傾向の強いことがうかがえる。

まとめ：改訂 MIE (新称 IUE) の尺度構造は、機能的自我状態次元でも心理エネルギー志向性次元でも、仮説に対応した高い因子的独立性および再現性を有し、下位尺度の内的整合信頼性および再検査信頼性も高い水準にあることが確認された。

(要約者：西川和夫)